

になり、興味深い史実そのものはとらえられても、その間の連続した歴史的過程がとらえられずに現実から浮きあがってしまい事実だけが一人歩きしてしまいうらいがある。

そうかといって史実のみをまんべんなく並べて骨格を構成してもそこには面白さというか、特殊性というか、甲府市の個性はあらわれてこない。このことは当然史実に対する筆者の価値観ともからまる問題である。

近現代、特に現代の史実を事実として分析するにあたってはどこまでが歴史的事実であり、どこからが価値観に関する立場、部門であるかの判定はきわめて困難である。

現代における通史としては歴史的现实、つまり資料をして真実を悟らせる立場をつらぬくべきであろう。だがその外に甲府市の歴史にみられる特殊な条件、あるいはこれの歴史的展開が興味深い史実として読者にうったえるところがあればそれはそれで意味があるとは考えるのだが、完全に史実、歴史となっていない現段階ではそれでは普遍性を欠くものといわれかねない。この両者の相関について苦しんだというのが私のいつわらぬ告白である。次の百年史が編纂される時、現在の甲府市史百年史近現代編が完全に史実となったときを思うと責任の重さに慄然とする次第である。

（市史編纂さんを終えて）

専門委員 新藤 昭良

甲府市史は、甲府市制一〇〇周年を記念し史料編を包括した本市初の企画で、かつ、民衆史的在り方を前提として編纂された画期的

事業であります。

私は、昭和五十八年、編纂に着手の際、市助役の立場で甲府市史編纂委員会副委員長を任命され、職員委員長はじめ委員諸先生方のご尽力を頂き編纂が軌道に乗る見通しを得ることが出来、心から敬意と感謝をいたしたのであります。六十二年、任期満了による退任後、引続き市長から、専門委員として執筆の委嘱をうけ「現代編」を担当することになりました。戦後の混沌とした社会から安定へ、そして発展・飛躍へと向かう甲府市の姿を紀として綴る意義あるこの事業に一片の貢献が出来ればと思ひ改めて参画させていただきました。

戦後行政は、サーブिस行政として「揺り籠から墓場まで」と言われてきました。従って政治、経済、社会の殆どが行政との関わりがあるため、既刊の市史は行政史としての性格が濃いものでありました。民衆史としての市史を執筆するにあたっては市民の側からの観点に務めるとともに、その他幾つかの課題がありました。特に、現代は何時までが史紀なのか、何が史紀として妥当なのか、執筆の限界はどうかなど難しいものがありました。が委員の先生方の協議により一定の方向が確立され、この度編纂が完了いたしましたことは誠に同慶にたえないところであります。また、事務局の皆さんのご尽力に感謝するとともに、次の市史編纂のため史料保存システムを体系化されんことを要請申しあげるものであります。

市史編纂と私

専門委員 松本 武秀

甲府市史の編纂には文芸と教育の事項の記述にかかわったが、二

つの点で苦勞した。もとより自分の薄学が原因だが、教育に関しては『山梨県教育百年史』が既に刊行されており、新資料の発見が困難だった。甲府市が戦災にあり、資料の多くが消失してしまっていたこともまた困難性を倍加させたのであった。文学の記述では文学と文芸、ドイツ文学の古典的手法で言えばポエジーとリテラツールの扱いをどうするか、つまり文芸性の高い作品とその作家及びその影響に限定するかいなかの問題であった。この点に関して甲府市史の「文学」の事項の記述にかかわった四人の委員の間の統一の見解を見出すのにも容易ではなかった。

また直接担当した俳句に関しては戦後俳句文学が、『雲母』に限定されるような甲府市の俳壇状況にあり、同人レベルで言えば短歌に比べ、甲府在住在所属の結社数も少なく、記述の多様化に困難を感じたものである。そんな意味で委員の皆さんや事務局の方々に種々御迷惑をおかけしたが、一方私個人について言えば多大な学習にもなった。とりわけ近世部会の「学芸」の事項に関しては、近世甲州の儒学史や思想に関する領域は個人的人物や典籍の一部しか理解がなかったもので、高須芳次郎氏の「近世日本儒学史」などを改めて読みなおすといった作業から始めたので、自己学習には大いになった。先行研究が少ないという意味では、甲府狂歌史の記述についても色々勉強させられた。『吉原十二時』に甲府狂歌師の作品が登場するぐらいの知識しかなかったので、近世甲府狂歌壇の記述を一応まとめ、一つの傾向性を把握出来たのも市史にかかわった恩恵だと思っている。

川柳に先行する雑俳についても同様で、前句付けの若干の知識があった程度だったが、この機会に雑俳の原典二〇冊ぐらいを読み得

たのは幸せだった。今後この面の追求をやろうと考えている。

近代では、『新体詩歌』の全五冊を史料編に収録出来たのも忘れ難い。日本で二番目に刊行された詩集であるが、これまで翻刻出版されていない。市史史料編に収録し、研究者の便に供することが出来たことはすばらしいことだと思う。またその出版社「徴古堂」が東浦栄次郎の個人会社でなく、甲府の町衆や地方の豪農たちによって作られた会社であったことが明らかとなった点も意義深い作業であった。

なお委員長の磯貝先生から本文批判とかかわって、平安期の国語の音便について質問を受けた体験は、研究の厳密性といったものについて教えられ、感銘を受けた。一資料の引用について一語の音便まで確かめようとする先生の研究者としての態度には敬服させられた。自分の研究態度の安易さへの反省を強くうながされたものだった。

総括して大いに勉強させられた市史の編纂であったように思われる。

「甲府市長期統計」編集を終えて

専門委員 八 束 厚生

甲府市統計をもとに甲府市一〇〇年の姿を市民に分かりやすく伝える小冊子を作成することを企図して編集作業が開始された。このとき用意された統計書は、

「甲府市統計一斑」（明治三十五年）、「甲府市統計書」（明治三十七年—明治三十九年、明治四十一年、明治四十三年、明